

## 性的表現とジェンダー

—性を題材にしたマンガ作品を描く商業作家に対する聞き取りから—

首都大学東京 大倉 韻

### 目的

本報告の目的は、性を題材にして描かれたマンガ作品を執筆する商業作家へのインタビュー調査、およびそれら作品内容の分析などから、性を題材とした作品の作家がどのように作品と向き合うのか、また彼らのジェンダー観は作品内容とどのような関連があるのか、を考察することにある。

### 方法

ある青年男性向け商業コミック誌で性を題材とした(TG、思春期の性、変態性欲など)作品を掲載している/いた男性作家2名、女性作家2名に対する半構造化インタビューを行った。また同誌編集部へのインタビュー、人気アンケート、各作品についての内容分析も行い、分析に用いた。

同誌は作家の描きたいものを尊重する編集方針を取っており、作品内容も多様性に富んでいる。このため青年男性に限らず若年女性や高齢男性など幅広い読者層を獲得している点が特徴といえる。

### 結果

聞き取りの結果、作家は自らの作品について以下の三つの軸に沿って位置づけ、その上で作品に言及している可能性が示唆された。

- ① 「目的—手段」アプローチ：性的題材それ自体を作品の主題として設定しているか、性とは直接かわりのない主題をより多くの読者に読んでもらうために性的な要素を盛り込むか。
- ② 「ジェンダー秩序—攪乱」アプローチ：既存のジェンダー秩序を維持するか、攪乱するか。男性向け作品は前者に寄る傾向があり、女性向け(特にやおい作品)は後者が多い傾向があった。
- ③ 「ACG データベース準拠—離脱」アプローチ：アニメやマンガ作品に共有されているSF的・ファンタジー的な「データベース」を用いて作品を描くか、そこから離脱するか。男性向け作品と女性向け作品では構築されてきた「データベース」の内容が若干異なっており、作家がどちらのデータベースを採用するかは作家の性別にある程度関係していた。

### 考察

聞き取りを行った男性作家のうち一名は性行為やポルノグラフィが秘匿される社会規範に疑義を抱いていたが、男性向けデータベースの中で性を扱うと多かれ少なかれポルノグラフィに類する要素が含まれてしまうことに気づき、作中でこれらデータベース要素の切り離しを行っていた。また女性作家のうち一名は作中で男女の性行為を含む関係性を描いていたが、彼女も同様既存の女性向けデータベースから離脱しようとしていた。女性向けの性表現は『『権力構造』を〈ズラシ〉固定的なものにしない』(堀2009)などの特徴があるとされるが、近年ではその〈ズラシ〉自体が類型化され固定化してきている傾向がみられるためであろう。

そういった新たな試みは多くの読者を獲得しているとはいいがたいものの、男性向けのでも女性向けのでもないマージナルな性的作品を模索する運動のひとつの成果といえることができるだろう。

参考文献：堀あきこ，2009，『欲望のコード—マンガに見るセクシュアリティの男女差』臨川書房。